

1950年から60年代における日本のニットデザインの基礎調査 第1報

A Basic Research of Hand-Knitting Design in Japan in the 1950 and 60s.

近藤 静香

Shizuka Kondo

要旨

1950年から60年代の編物ブーム時にどのような編物が行われていたのかを明らかにするために、本稿では50年代の日本で発行された編物書13冊のニットデザインの基礎調査を行った。その結果、ウェア類の比率が68%と高い理由として、紡績会社がファッションブックや雑誌を利用し、ウェア類の人气が高まり、編糸の販売促進に繋がったことがわかった。50年代で最も使用されていた編物針は性別・年代別問わず2号棒針であり、中細糸対応の編機と棒針の併用が行われていたことから、50年代は中細糸中心で作品が製作されていた。50年代でも様々な技法が使用されていたが、編物と刺繍等の手芸技法を融合させたデザインが多く存在し、明治時代から洋裁教育の影響を受けている可能性が明らかになった。13冊の編物書内掲載のコラムの内容を調査したところ、海外の編物モードの紹介が最多掲載で、編糸の選び方から編物の仕上げ方法までの編物に関する一連の流れに関するコラムが紹介されていた。また、染色などによる編糸の再生方法も掲載され、当時の編糸の貴重さが感じられた。しかし1950年代後半には扱いやすい新糸の開発などの理由により、編糸の再生に関するコラム数は減少傾向になった。

●キーワード：ニットデザイン (Knitting design) / 編物ブーム (Knitting boom) / 手編み (hand-knit)

I はじめに

日本における本格的な編物教育は明治初期から始まった。谷本きよは編物が日本へ伝来された経緯と学校教育によって普及された流れを述べ、当時の編物教育の導入を明らかにした¹⁾。

明治当時の教育においては長谷川綾子が明治期における編物教育を19点の書物から分析し、「衣服の西洋化に伴い、手芸(編物)が女子教育の場に深く定着し、それと共に女性の自立を助け、国の為にもなっていた」と述べている^{2) 3)}。

1921年に実業学校令、職業学校規定が訓令され、女学校が専門学校に昇格した後、第一次世界大戦後の社会情勢不安で減少傾向だった編物教本の出版が増加し、実用的な編物被服の構成と、様々な性別・年代に対応するデザインが流通し始めた。森理絵はこれを「日本における第一次編物ブームと位置づけ、また、1920年から1930年代始めを第二次編物ブームである」と論じ、この時期は編物が「家庭生活に潤いをもたらすこと」「余暇の善用」といった意味と共に、内職して家庭の経済面でも大きな意味をもっていたとした⁴⁾。

しかし、1940年に全世界が混乱の戦争時期に突入し、女性は節約と抑圧の日々を強いられた。

1945年に太平洋戦争が終了直後は、戦中と変わらず食料と衣料品は乏しく、1947年には「衣料配給規則」、「衣料品切符規則」が復活し、衣生活の厳しさは一層増し、多くの人は国民服や、もんぺ姿、更生服などを着用していた。

依然資源不足は続き、既製服は未熟な状況であり、洋服の入手は注文仕立てか、家庭洋裁しかなかった。当時の主婦にとって、家族の洋服を仕立てることは家計を助けることもあり、重要な家事の一つになった。そのような状況下でファッション雑誌の復刊や洋裁学校の再開などが相次ぎ、全国に洋裁学校が急増した⁵⁾。また、編物教室も各所で開校され、編物は洋裁と同様に人気を博し⁶⁾、家庭内でも様々なものが編まれていた。

しかし、時代が進むにつれ、1960年代後半には景気の拡大と共に洋服も大量生産・消費の波が押し寄せ、家庭で洋裁を行うことは激減した⁷⁾。このように、明治・大正・昭和初期の編物における洋裁教育の盛り上がり方と、表1の戦前・戦後の梳毛糸用途別生産量を見ると、

表1 戦前、戦後の梳毛糸用途別生産量（『あみもの毛糸いまむかし』P115より抜粋）

(単位=1000ポンド)

		織糸		メリヤス糸		手編み糸		合計	
		生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
戦前	昭和 9年	50.870	62.8	21.047	26.0	9.130	11.2	81.048	100.0
	10年	60.933	67.3	20.489	22.7	9.081	10.0	90.503	100.0
	11年	68.166	66.1	24.828	24.0	10.179	9.9	103.173	100.0
戦後	27年	43.987	65.6	9.307	13.9	13.772	20.5	67.066	100.0
	28年	54.688	62.0	15.644	17.7	17.873	20.3	88.212	100.0
	29年	62.345	66.3	15.603	16.6	16.079	17.1	94.034	100.0
	30年	63.714	62.0	18.920	18.4	20.070	19.6	102.716	100.0

戦前と戦後では編糸の消費量は2倍であり、1950から1960年代が戦後における編物ブームであったとされる。

現在、日本における編物の歴史の変遷に関する研究は存在するが、1950年から60年代の編物に関する調査や見当たらない。当時は編物愛好者が多かったことから1950年から60年代の編物ブーム時に日本でどのような編物が好まれて行われていたのか調査を行い、本稿では50年代の編物状況報告の第1報とした。

II 調査方法

1950年代に出版された家庭の主婦を読者層に設定した、文芸学図書館所有、または著者が自ら入手した編物が主題となっている雑誌又は書籍13点を以下の項目

に沿って調査を行った。調査した編物書の一覧は表2に示した。

- ・アイテム別掲載数
- ・性別・年代別アイテム掲載数
- ・使用号数
- ・性別・年代別使用号数
- ・使用技法
- ・編物に関するコラム

尚、表2以降は書名を省略し、表2に示した識別番号はそれぞれの編物書を表すこととした。

II-1-1 アイテム別掲載数

調査対象とした編物書に掲載されていたニットデザイ

表2 調査の対象とした刊本

識別番号	書籍及び雑誌名	著者	発行元	発行年
1	春の編物と家庭染色	—	大日本雄弁会講談社	1950
2	婦人世界 秋の毛糸あみもの大全集	—	大日本雄弁会講談社	1950
3	婦人倶楽部付録 新しいデザインの春向き編物特集号	荒木三郎	大日本雄弁会講談社	1951
4	編物大事典	飯村二郎 飯村清子	ハンドブック社	1951
5	手編みでも機械編でもできる 秋の流行編物集	—	大日本雄弁会講談社	1952
6	婦人・子ども・男子 冬の編物と洋裁全書	—	大日本雄弁会講談社	1952
7	編物	—	主婦の友社	1953
8	冬の洋裁・編物大全集	—	大日本雄弁会講談社	1953
9	婦人の編物	—	主婦の友社	1956
10	冬の編物新型集	—	大日本雄弁会講談社	1956
11	春の編物と洋裁（婦人生活3月号付録）	—	同志社	1957
12	防寒あみもの（婦人生活12月号付録）	—	同志社	1958
13	毛糸あみもの大全集	—	雄鶏社	1959

表3 アイテム分類表

ウェア類	上着、セーター、ブルオーバー、スカート、ジャケット、チョッキ、マント、コンビネーション、ケープ、遊び着、オーバーオール、オーバー、子ども服、スーツ、寝巻、ナイトガウン、ドレス、ワンピース、ジャンパー、水着、ロンパース、ベビー服、三つ揃、ポレロ、カーディガン、ジレー、コート、運動服
小物類	肩掛、帽子、靴下、襟巻、手袋、ショール、スカーフ、スリッパ、おくるみ、キャップ、前掛、ベビーシート、レギンス、ブーティ、アフガン、毛布、靴下カバー、巾着、バック、ベレー、マフラー、ストール、ベルト
下着類	股引、ペチコート、ズボン下、アンダースカート、肌着、下着、腹巻、アンダーシャツ、ブルマー、おむつカバー、スリッパ、女性着、パンティ
和装類	半襦袢、着物用チョッキ、足袋、ちゃんちゃんこ、茶羽織、着物、打掛
その他	湯たんぼカバー、室内用カバー、氷袋カバー、テーブルクロス、ベッドカバー、座布団、造花、人形、クッション、ラグ、鍋掴み、前掛け

ンを、「ウェア類」、「小物類」、「下着類」、「和装類」、「その他」に区分けした(表3)。幼児のおもちゃ、人形、インテリア小物などは「その他」に分類し、50年代でどのようなアイテムが編まれていたのかを調査した。

調査の結果

表4の結果から図1に示したように、50年代で最も編まれていたのは「ウェア類」の810点で全体の68%を占めていた。次に「小物類」は17%で、「その他」は5.4%だった。

「下着類」は5.3%となり、40年代から引き続き、家庭内で下着類が編まれていたことがわかった。

明治期には「ウェア類」と同率の6%だったが「和装類」は、大正期で3%、昭和初期で5%と落ち込み⁸⁾、50年代では36点しか掲載されず全体の3%であった。

表4 アイテム分類表

識別番号	ウェア類	小物類	下着類	和装類	その他
1	32	2	—	—	—
2	37	—	—	—	6
3	44	—	—	—	5
4	29	20	10	—	1
5	58	26	11	4	17
6	60	5	6	1	—
7	60	26	11	4	17
8	26	2	—	—	—
9	39	35	—	—	1
10	95	8	—	5	—
11	76	12	—	—	3
12	107	32	10	13	6
13	147	45	16	9	9
合計	810	213	64	36	65

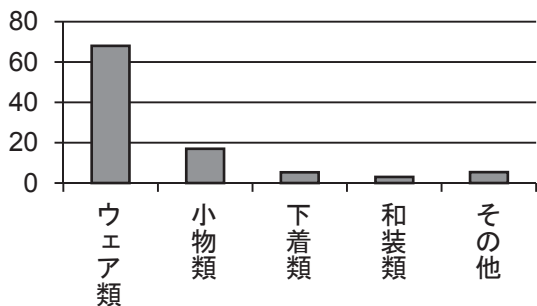


図1 アイテム別掲載数比率 (単位：%)

II-1-2 性別・年代別アイテム掲載数

表3に掲載されていたアイテムを「女性用」、「男性用」、「幼児・子ども用」、「その他」に分類し、50年代にどの性別・年代の編物が製作されていたのかを棒針とかぎ針に分け、それぞれを表5にまとめた。

調査の結果

(1) 棒針 - 「女性用」が最も多く全体の44%であっ

た。続いて、「幼児・子ども用」で34%、3番目に「その他」の11%の順で掲載されていた。「男性用」は8.8%であった(図2)。

表5 性別・年代別掲載アイテム分類

棒針					かぎ針				
識別番号	女性	男性	幼児子ども	その他	識別番号	女性	男性	幼児子ども	その他
1	23	2	7	2	1	1	0	0	0
2	22	2	13	9	2	0	0	0	11
3	25	4	14	3	3	0	0	0	0
4	20	3	15	20	4	0	0	0	1
5	25	0	16	0	5	0	0	0	3
6	32	4	24	5	6	0	0	0	3
7	21	15	21	27	7	4	0	0	26
8	14	0	14	0	8	0	0	0	0
9	36	15	0	2	9	0	0	0	0
10	33	3	27	2	10	10	0	5	6
11	33	3	27	2	11	10	0	5	6
12	50	8	53	20	12	5	1	10	17
13	81	23	90	17	13	14	0	13	15
合計	415	82	321	109	合計	44	1	33	88

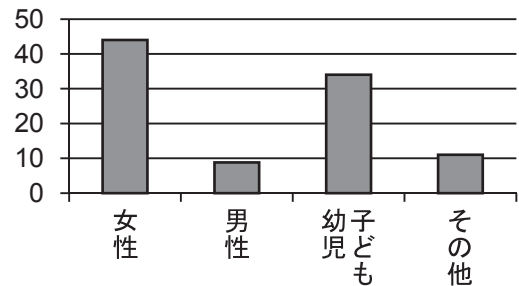


図2 性別・年代別掲載アイテム分類比率-棒針 (単位：%)

(2) かぎ針 - 図3の通り、最も多く掲載されたのは「その他」であり53%であった。次に「女性用」は26%であり、3番目の「幼児・子ども用」は19.8%であった。「男性用」は1.9%であった。

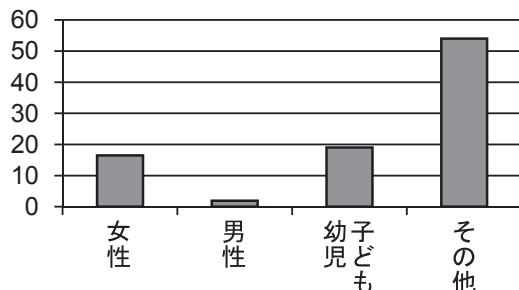


図3 性別・年代別掲載アイテム分類比率-かぎ針 (単位：%)

考察

長谷川の調査によると、明治期では編物のアイテムは靴下や肩掛けなどの小物中心であり、大正期には戦争に

より編糸が入手困難になるなど編物業界では下火の期間が長かった⁹⁾。戦争終了後から洋裁化と洋裁ブームの波に乗り、昭和初期は「ウェア類」が全体数の62%に及ぶことがわかった¹⁰⁾。

引き続き、50年代でも「ウェア類」の人气が68%までに高まった理由の一つとして図4の様な紡績会社からウェア類の編み方が掲載されたファッションブックが次々に創刊され、様々な編物が紹介されていたことから洋装のイメージが庶民に掴み易くなったこと、第二に、紡績会社が編糸販売促進のためのテレビコマーシャルや雑誌広告を強化したことで¹¹⁾、編物で製作されたウェア類がより身近に感じられたと考えられる。



図4 紡績会社から発行されたファッションブック

II-2-1 編物用使用針と糸

表1内で掲載されている編図に使用されている棒針、かぎ針の号数を以下のルールに沿って分類し、50年代でどの号数の針、糸が使用されていたのかを調査した(表6)(表7)。

- 1) 針の号数は0~10号とし、それ以外の号数は「その他」とした。
- 2) 編機と手編みの両方で制作できる作品は調査対象としたが、編機のための編図のものは、対象外とした。
- 3) かぎ針では号数の指定がないものは「その他」とした。
- 4) アフガン針は「その他」に分類した。

調査の結果

(1) 棒針-表6の結果、最も使用されていた棒針の号数は2号で全体の48%であった。次に1号で38%、3号で8.6%の順となった(図5)。2号と1号を両方合わせて86%も使用されていたということは、50年代に使用されていた毛糸は極細~中細糸が主流であったということが判明した。しかし、太糸を使用する8号、10号も

若干ではあるが各4件と編まれていたことがわかった。

(2) かぎ針-50年代でもっとも使用されていたかぎ針の号数は号数指定なしの「その他」であったが、使用毛糸を調査すると大多数が極細2本取りや、中細糸を指定しており、棒針同様かぎ針でも最も使用されていた毛糸は極細から中細糸だったことが判明した(図6)。

表6 使用号数一覧 -棒針-

識別番号	棒針の号数											
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他
1	-	3	20	10	1	-	-	-	-	-	-	1
2	1	17	21	7	-	-	-	-	-	-	-	-
3	-	11	25	10	-	-	-	-	-	-	-	-
4	2	8	44	6	-	-	-	-	-	-	1	-
5	-	16	21	1	-	-	-	-	1	-	-	5
6	-	16	33	9	-	-	-	-	-	-	-	-
7	8	21	53	3	-	-	-	-	-	-	-	-
8	-	3	13	2	-	-	-	-	-	-	-	-
9	-	15	37	1	-	-	-	-	-	-	1	-
10	-	8	18	3	-	-	-	-	-	-	1	-
11	1	26	40	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12	5	58	46	15	-	-	1	-	3	-	1	3
13	2	130	48	8	2	1	1	-	-	-	-	-
合計	19	332	419	75	3	1	2	0	4	0	4	9

表7 使用号数一覧 -かぎ針-

識別番号	かぎ針の号数											
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他
1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11(指定号数なし)
3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3(指定号数なし)
4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1(アフガン)
5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3(指定号数なし)
6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3(指定号数なし)
7	-	1	-	-	-	2	-	4	-	2	-	20
8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	5(指定号数なし)
11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14(指定号数なし)、 太:1、細:1
12	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	15(指定号数なし) アフガン:10
13	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	14(指定号数なし) アフガン:24
合計	0	1	0	0	0	1	2	0	7	0	2	126

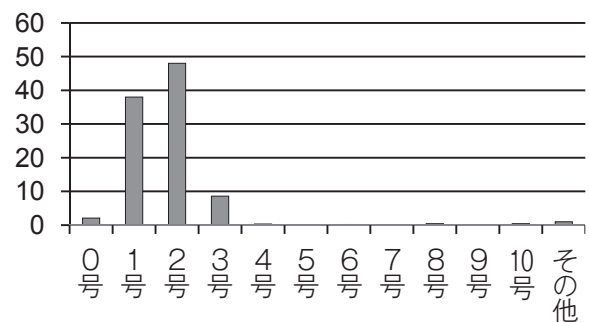


図5 使用号数比率-棒針- (単位: %)

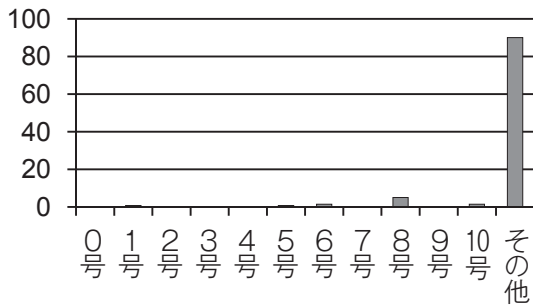


図6 使用号数比率-かぎ針- (単位: %)

II-2-2 性別・年代別編物用使用針と糸

表2内の編図を「女性用」、「男性用」、「幼児・子ども用」、「その他」「指定なし」で分類し、各性別・年代別で最も使用されている棒針、かぎ針を調査し、表8にまとめた。

表8 性別・年代別使用棒針・かぎ針一覧

使用号数	棒針				かぎ針			
	女性	男性	幼児子ども	その他	女性	男性	幼児子ども	その他
0	-	-	1	9	-	-	-	-
1	161	17	118	42	-	-	-	1
2	170	45	139	51	-	-	-	-
3	29	12	28	5	-	-	-	-
4	1	1	-	-	-	-	-	-
5	-	1	-	-	-	-	-	-
6	1	-	-	1	-	-	-	2
7	-	-	-	-	-	-	-	-
8	3	-	-	-	1	-	-	7
9	-	-	-	-	-	-	-	-
10	2	-	-	-	-	-	-	2
その他	-	-	-	-	15	2	13	14
指定なし	-	-	-	-	8	3	9	60

調査の結果

- (1) 棒針・女性用-2号は170点、1号は161点と大きな差はないが、3号は29点だった。
- (2) 棒針・男性用-2号は45点で最多であり、1号は17点、3号は12点の順で使用されていた。
- (3) 棒針・幼児・子ども用-2号が139点、1号が118点と続き、最後は3号の28点の順で使用されていた。
- (4) 棒針・その他-2号は51点、1号は42点と使用されていて、3番目に0号が9点使用されていた。

棒針で最も使用されていた号数はどの性別・年齢別でも2号針だった。「男性用」以外は次点に1号、3号であり、「女性用」や「幼児・子ども用」、「その他」ではより細かい号数が使用されていたことがわかった。「男性用」は2号の次に3号が続いた。

(5) かぎ針・女性-その他が15点、次に指定なしの8点だった。

(6) かぎ針・男性用-指定なしで3点、その他の2点で、大きな差はなかった。

(7) かぎ針・幼児・子ども用-「その他」の13点が最も使用されており、次に指定なしであった。

(8) かぎ針・その他-「指定なし」が60点、次にその他の14点であった。

かぎ針では元々ウェア類のアイテム数が少なく、その他で最も多く利用されていた。使用号数は指定なしが大多数であるが、6、8、10号針の使用も発見することができた。

考察

50年代には2号針以外にも使用されていたが、最も使用されていた号数は全体の約半数の割合を占めた2号棒針であり、どの性別・年代別においても、最も使用されていたのも2号棒針という結果であった。この結果から、50年代では性別・年齢別によって号数を使い分けるということはなく、中細糸を中心に作品が製作されていたことがわかった。

中細糸が最も利用されていた理由として考えられるのは、「昭和35年(1955年)前後からの(中細糸を使用する)編機の普及などから、中細は全体の七、八割、のウエイトを占める」¹²⁾ようになり、この理由として、「婦人セーターの需要が伸びた」¹³⁾と『あみもの毛糸いまむかし』で述べられている。その裏付けとして、識別番号5、7、9、11、12、13内には編機と棒針が併用できる編み方が掲載されており、使用されている糸は両方に対応できる中細糸だったため使用されていたと推測される。

II-3 使用技法

50年代にはどのような技法が使用されていたのか、表1に記載されている全ての編図を棒針編は「メリヤス編」「裏メリヤス編」「ガーター編」「鹿の子編」「模様編」「編み込み編」「縄編」「ゴム編」「引上げ編」「透かし編」「複合編」「手芸との複合」「その他」に分類した。

かぎ針編は「細編」「長編」「長々編」「模様編」「モチーフ編」「その他」とし、表9にまとめた。尚、調査時に以下の分類基準を定め、調査を行った。

- 1) 調査した箇所はゲージで使用されている技法とした。
- 2) 「模様編」は主に表目、裏目などで構成されている模様編とした。
- 3) 「編み込み編」は2色以上の糸を柄に沿って編み込む

表9 表2内で使用されていた技法一覧

識別 番号	棒針													棒針 ワンポイント刺繍	かぎ針					
	メリヤ ス編	裏メリ ヤス編	ガー ター編	鹿の子 編	模様編	編み込 み編	縄編	ゴム編	引き上 げ編	透かし 編	複合編	手芸と編 物の複合	その他		細編	長編	長々編	模様編	モチー フ編	その他
1	3	-	-	1	5	4	7	1	-	2	9	2	1	5	-	1	-	-	-	-
2	10	-	2	1	4	7	2	1	1	11	5	4	1	-	3	2	-	6	-	-
3	9	-	-	1	9	5	4	1	2	2	4	9	-	5	3	-	-	-	-	-
4	13	-	1	-	11	7	2	4	-	3	12	8	-	-	-	-	-	-	-	-
5	14	-	-	-	5	1	-	1	1	2	13	4	-	-	1	1	-	1	-	-
6	20	-	1	1	11	9	4	1	4	-	8	12	-	4	1	-	-	5	-	-
7	26	1	4	1	7	4	11	4	5	9	10	6	4	-	11	-	-	3	4	8
8	4	1	-	-	5	2	3	1	2	1	2	5	-	1	2	-	-	-	-	-
9	25	-	-	-	1	1	1	2	1	3	2	15	1	13	-	-	-	-	1	2
10	36	9	1	-	4	6	2	5	8	2	4	17	-	6	1	1	1	-	3	6
11	22	2	1	1	3	5	3	1	4	5	5	10	2	8	3	-	-	18	3	3
12	33	5	-	1	5	15	12	6	18	5	8	24	2	3	8	1	-	12	-	10
13	35	11	2	4	12	28	6	10	34	13	9	26	4	7	8	-	-	12	1	24
合計	250	29	12	11	82	94	57	38	80	58	91	142	15	52	41	6	1	52	17	53

技法のものとした。

4) 複数の技法が同等の割合で使用されており、ゲージが複数掲載されていた場合は、「複合編」とした。

5) 後加工として刺繍やコード飾り、シャーリング、スマッキング、ピンタック、ビーズ等が施された特徴的なデザインは「手芸との複合」とした。

6) かぎ針の「模様編」は細編や長編等を組み合わせた技法とした。

8) アフガン編は「その他」に含めた。

調査結果と考察

表9の調査の結果、50年代で最も使用されていた技法は「メリヤス編」で全体の26%であった。メリヤス編は編物の基本であり、どの編物書にも必ず編み方が記載されていた技法であった。

メリヤス編の次に使用されていた技法は「手芸と編物の複合」であり14.8%と次点の「編み込み編」の9.8%とは5%の差異があった。

3番目に使用されていた技法は、2色の糸を柄のデザインに沿って編込んでいく「編み込み編」であり、雪の結晶柄や格子柄など様々な柄が編まれていた。

4番目に複数の技法を組み合わせた「複合編」で、5番目に表目や裏目などを組み合わせた模様編が続いた。

また「手芸と編物の複合」とは別に、ワンポイントで編地に刺繍を施していたデザインも多数見受けられたことから、「ワンポイント刺繍」の調査を行った。その結果、52点の該当作品が見つかり、全体の5.4%となった(図7)。

かぎ針はアフガン編を含む、「その他」の31%が最も編まれていたが、これは識別13内にアフガン編の作品が多く掲載されていた結果であると考えられる。

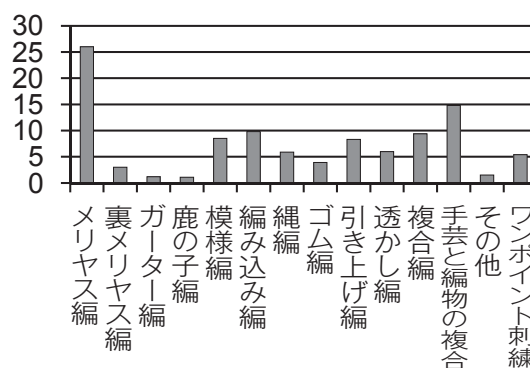


図7 使用技法割合—棒針 (単位:%)

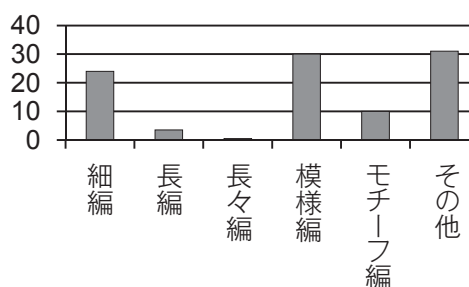


図8 使用技法比率—かぎ針 (単位:%)

次に編まれていたのが、「模様編」で1950年初期に作品点数は多くはないが、50年代後期に使用頻度が高まっているという結果になった。

最後に「細編」であるが、かぎ針の最も基本的な技法であるため、表2のかぎ針が掲載されていた全てに編物書で細編は使用されていた(図8)。

考察

50年代で使用されていた技法を調査した結果、「メリヤス編」と図9のような「手芸と編物の複合」が大きな

割合を占めていることがわかった。

「メリヤス編」は最も基礎的かつシンプルな編地であることから、性別・年齢関係なく様々な面で使用されており、最多使用技法になったと考えられる。

「手芸と編物の複合」はワンポイント刺繍の割合を合わせて20.2%となることから、50年代には一般的な技法だったといえる。その他に使用されていた技法は、ビーズを編み込んだもの、コード飾り、シャーリング、スモッキング、ピンタックや織物風のデザインや革と組み合わせた作品等も発見することができた。



図9 配色と刺繍で柔らかみを添えたロマンチックな若向のセーターのデザイン

II-4 編物に関するコラム

表2内には編物の方法以外にも編物や糸に関するコラムが掲載されており、当時の女性は編物に関する知識はコラムから得ていたと推測される。表2内に掲載されていたコラムにはどのような項目、内容が書かれていたのかを「毛糸編物の洗い方」「毛糸の扱い方」「仕上げ方法」「毛糸の巻き方」「毛糸編物の保存法」「編物毛糸の

再生方法」「毛糸の染め方」「毛糸のつなぎ方」「海外モードの紹介」に分けて調査を行い、当時の女性が編物に対してどのような知識を編物本から得て、その内容は年ごとに変化はあったのかを調査し、表10にまとめた。

調査結果

最も掲載されていた内容は「海外モードの紹介」で7件であった。紹介の中には海外の編物情報が、ファッション写真や編み方と共に紹介されていた。

識別番号2では、アメリカで一番有名な毛糸と毛織物会社ボヌニー社の糸を使用したデザイン5点が掲載されていたり、識別番号10の中では、「新しい年の編物の流行」というコラムで「ニットド・ルックというセーターを着ていかに洗練された美しさを表現するかということが、流行の新しい課題である」¹⁴⁾と述べられている。

また、識別番号12では、「海外のニットング」と題して、縄編のスキーウェアやバルキー調のカーディガン、ラグランスリーブのトッパーコートが紹介されていた。

掲載点数5点の「毛糸編物の洗い方」は識別番号7の中では「洗濯」という項目で、「使用する洗剤はモノゲンなどの中性洗剤とアンモニア、酢で、つかみ洗いによる下洗い、本洗い、濯ぎ洗い」と続き、脱水の意味の搾り方は洗濯板2枚と石を使用する¹⁵⁾という記述があった。識別番号4では洗濯前に袖口、裾口のゴム編が伸びるため、木綿糸でぬい、糸を緩めてぬるま湯に浸すという毛糸製品を貴重に扱う方法も紹介されていた。

次に4件と掲載されていたものは「仕上げ方法」と「編物毛糸の再生方法」である。「仕上げ方法」は当て布をしてスチームをあてるという現代と同じ方法が行われていた。

着古したセーターやサイズが合わなくなったセーター

表10 表2内で掲載されていたコラム内容一覧

識別番号	毛糸編物の洗い方	毛糸の扱い方	仕上げ方法	毛糸の巻き方	毛糸編物の保存法	編物毛糸の再生方法	毛糸の染め方	毛糸のつなぎ方	海外モードの紹介
1	○	○	○	○	○	—	—	—	—
2	—	—	—	○	—	○	—	—	○
3	—	—	—	—	—	—	—	—	○
4	○	—	○	○	—	○	—	○	—
5	○	○	○	—	—	—	○	—	—
6	—	—	—	—	—	—	—	—	○
7	○	—	○	—	—	○	○	—	—
8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	○	—	—	—	—	○	○	—	—
10	—	—	—	—	—	—	—	—	○
11	—	—	—	—	—	—	—	—	○
12	—	—	—	—	—	—	—	—	○
13	—	○	—	—	—	—	—	—	○

の糸を解き、糸を再利用する「編物糸の再生方法」が行われていた。ほどいた糸は糸目の編み癖がついており、それを戻すための専用の機器や、やかんを活用する方法を紹介したコラムが識別番号2、4、7、8の中で掲載されていた。また、「糸の染め方」も編直し同様に行われ、糸を再生するための染色を行う方法が3件掲載されていた。識別番号10の中で、「解いた糸を、四十センチくらいのかせにし、(一部省略)好みの染液の中に入れて染め、十分に乾いたら、中央のくるんだ木綿をとりはずし、染めてないところを染めると二色のぼかし染になる。この糸を使用すると、更生したとは思えぬ面白い味のものがある。」¹⁶⁾と記載されており、糸を工夫して染色を行い、編物を再び楽しむ様子がわかった。

「糸の巻き方」とは糸巻器を使用して糸を玉状にする方法の事であり、当時はかせの状態糸が販売されていたり、糸の染直しをした際に糸巻機を使用するためこのコラムが掲載されていた。また、図10のような、糸巻機本体を手作りする方法も識別番号2の中に掲載されていた。しかし、1950年代前半にはこの内容のコラムは発見できず、家庭では糸巻器の必要性がなくなった可能性がある。

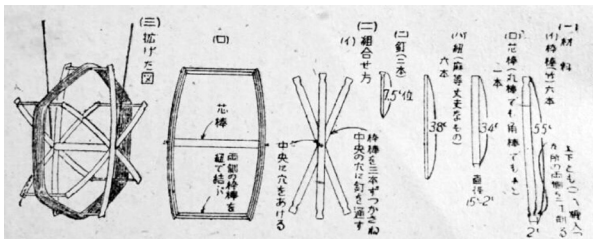


図10 糸巻器の作り方

考察

50年代では最新の編物の流行や海外のデザインが定期的ではないが紹介されていた。

また、編糸の準備から編物の仕上げ方法などの編物に関する一連の作業工程がコラムとして掲載されていたことがわかった。

この作業工程と共に、50年代の編物傾向として、ただ作品を編むだけでなく、アフターフォローとして糸の再生や再利用の仕方も紹介され、糸を資源として貴重に扱う傾向があった。

この時代的背景には1945年にアメリカ軍による爆撃攻撃で糸問屋が壊滅状態で、日本の編糸の在庫が無くなってしまったが¹⁷⁾、50年代に紡績会社から編糸の再

販が開始されるが¹⁸⁾、糸はまだ貴重であった。しかし、編物は編直しができることから経済的で家計をやりくりする当時の主婦にとって「編糸の再利用」に関するコラムは人気があったのではないだろうか。

だが、1956年頃から編物や糸に関するコラム数が減少し、1959年の1コラムのみとなってしまった。識別番号7には「ナイロン、レーヨンの手編み糸—新しい手編糸の勉強」の中で、「大量生産ができるアクリルの糸糸が紹介されており、糸糸に比べ扱いやすく、糸の染直しがいらぬほど堅牢度が高い」¹⁹⁾と記述されていることから、糸の再生や染色が以前より必要性がなくなったことが考えられる。

まとめ

本調査では50年代に発刊された主婦を読者層とした編物書13点をアイテム別掲載数、性別・年代別アイテム掲載数、使用回数、性別・年代別使用回数、使用技法、編物に関するコラム数とその内容について、編物に関する基礎調査を行い、以下のような結果となった。

(1) 50年代では、紡績会社による販売促進の為にファッションブックや雑誌広告などの宣伝効果によりウェア類の人气が高まり、前年代よりウェア類の人气が更に高まった結果となった。

(2) 当時使用されていた編物針は2号棒針が圧倒的に多い中、編機と棒針の併用が日常的に行われており、どちらにも対応できる中細糸が性別・年代別に問わず最も使用されていた。

(3) 50年代でも様々な技法が使用されていたが、手芸と編物を組み合わせた作品点数がメリヤス編作品数の次に多く編まれており、刺繍をはじめ、ビーズ編やコード飾り、シャーリングなどの様々な手芸技法が編物と組み合わせられていた。

(4) 50年代のコラムは海外モードの紹介から編物の洗濯、仕上げ方法などの編物制作に関する様々な情報や方法が紹介されていた。その中に数種類の編糸の再生方法が提案されており、編糸が貴重に扱われていたことがわかった。しかし、50年代半ばには扱いやすいレーヨン糸などの流通により、染直しや再利用の必要性がなくなり、このようなコラムは減少傾向になってきたことがわかった。

今後の調査として、50年代後期の編物書の調査数が前期と比較すると、より必要と思われるため、引き続き調査を継続して行っていく。また、同様の調査を60年代で行い、50年代と60年代では編物デザインや編物の

状況に変化があったのかを明らかにし、今後のニットデザインに生かして行きたいと考えている。

引用・参考文献

- 1) 谷本 きよ「編物の変遷について 史的考察」『山脇学園短期大学紀要』1964
- 2) 長谷川 綾子「明治期における欧風手芸（編物、刺繍）の女子教育の導入について 第1報」『聖霊女子短期大学紀要』、1993、no.21
- 3) 長谷川 綾子「明治期における欧風手芸（編物、刺繍）の女子教育の導入について 第2報」『聖霊女子短期大学紀要』、1994、no.24
- 4) 森 理絵、櫻井 あゆみ「近代日本における編物の変遷の一側面 -明治後期から昭和前期の編物書24点の分析を通して-」『日本家政学会誌 Vol.63 No5』 p 17
- 5) 増田 美子『日本服飾史』東京堂出版、2013、p 168
- 6) 5)、p169
- 7) Lela Nargi『Knitting Around The World』Voyageur Press, 2011, p165
- 8) 4)、p 9

- 9) 3)、p29
- 10) 4)、p9
- 11) 松下 義弘『あみもの毛糸いまむかし 日本手編み糸産業史』日本ヴォーグ社、1986、pp124~129
- 12) 11)、p115
- 13) 11)、p115
- 14)『冬の編物新型集』大日本雄弁会講談社、1956、p42
- 15)『編物』主婦の友社、1953、p248
- 16)『婦人の編物』主婦の友社、1953、p142
- 17) 11)、p94
- 18) 11)、p99
- 19) 16)、pp363~367

図版出典

- 表1 松下 義弘『あみもの毛糸いまむかし 日本手編み糸産業史』日本ヴォーグ社、1986、p115
- 図4 松下 義弘『あみもの毛糸いまむかし 日本手編み糸産業史』日本ヴォーグ社、1986、p37
- 図9 『婦人の編物』主婦の友社、1953、p4
- 図10『婦人世界 秋の毛糸あみもの大全集』、p55